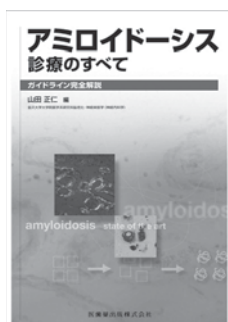


書評 BOOK REVIEW

『アミロイドーシス診療のすべて
ガイドライン完全解説』

(山田正仁 編)



- B5判, 238頁
- 定価 9,030円
- 医歯薬出版

アミロイドーシスは、臨床症状の重篤さ、病型・病態の複雑さ、そして有効な治療法の欠如から、数ある難病のなかでも、その筆頭に数えられるものであろう。本邦ではアミロイドーシスに関する研究が早くから盛んであり、1975年に大阪大学・山村雄一先生により特定疾患調査研究班が発足して以来、全身性アミロイドーシス、脳アミロイドーシスをはじめとする限局性アミロイドーシスの両者を広くカバーする、レベルの高い研究班が、今日まで継続されてきた。この班を育てられたのは、荒木淑郎、螺良英郎、朝長正徳、平井俊策、石原得博、池田修一教授ら、まさに本邦の内科学・病理学の泰斗とも言うべき先生方であり、それをさらに高いレベルに引き上げられたのが、本書の編者・山田正仁先生である。今春より本班は山田先生から安東由喜雄先生にバトンタッチされ、さらなる高みに向かって発展を遂げつつある。

本書は、山田先生が、厚生労働科学研究費補助金・難治性疾患克服研究事業・アミロイドーシスに関する調査研究班の重要な活動の一つとして編纂された「アミロイドーシス診療ガイドライン2010」を骨子とし、その内容をさらにわかりやすく、かつ詳しく拡充されたものである。山田教授からうかがったところでは、ガイドラインの編纂にあたり、多くの執筆者がその学問的熱情から、紙数の制限を超えて学識を開陳されるに至り、あ

まりに素晴らしい内容をカットするのは勿体ないとの声が高まり、本書が世に出ることになった由である。そのような経緯で編纂された書物であるから、内容の充実について論評の要はない。全編にわたって、とにかく素晴らしい構成と記載が続ぎ、まずは一読をお願いしたい。本邦において、複雑多岐な各種のアミロイドーシスについて、これだけのエキスパートがもれなく揃っておられることを、そしてこれらの先生方が明晰な日本語で書き下ろされた最新の知見を本書により与えられることを、読者ととともに心から喜びたいと思う。

評者は臨床神経内科医からアルツハイマー病研究者に転じた者である。アルツハイマー病研究の世界では、 β アミロイドのみに狭く関心が集中する揚げ句、思わぬ落とし穴に陥ってしまうことがしばしば生じる。このような時、アミロイドーシス全般に立ち戻って考えると、目から鱗が落ちる思いを経験する。本書からアミロイドーシス全般のupdateを学び、今一度進むべき道を再確認できることを嬉しく思う。

評者が研究対象とするアルツハイマー病において、 $A\beta$ が病因タンパク質であることの因果関係は家族性アルツハイマー病の遺伝学からも明白である。しかし治療の道はいずれも茨の道であり、 $A\beta$ に対する種々の降下療法が開発され、大規模な臨床治験が開始されながらも思わしい結果は俄に得られていない。そのため、いつしか科学的根拠を忘却しコンセプト自体に疑義を唱える声も出るなど、その混迷ぶりには心を痛めていた。しかし本書で安東先生、関島先生が明確に記されているように、家族性アミロイドポリニューロパチーにおいても、症状が軽度な時期に肝移植等の根本的治療が施された場合には、臓器障害の進展を防止できるとの知見は、アルツハイマー病はじめ他のアミロイドーシスの治療に碎身する研究者、そして病苦に悩まれる患者さんにとって真の福音であろう。

本書の出版を機に、本邦におけるアミロイドーシス研究がますます隆盛を極め、その治療が進むことを願ってやまない。

(東京大学大学院医学系研究科神経病理学,
岩坪 威/いわつばたけし)